

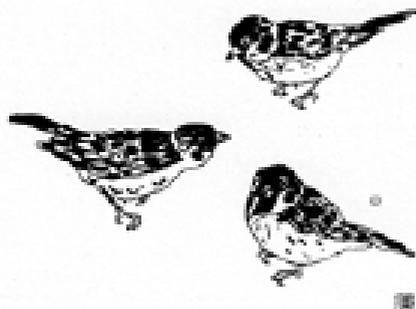
鴻 koh

月刊俳句誌

平成31年1月1日発行
(毎月1日発行)
第14巻第1号 通巻151号

1
月号

2019



一草に一木に冬立ちにけり

啄木鳥の音がいには野の音となる

草蔭にゐて螻蛄の草の色

また一人去つて一人となる花野

切藁を田に入れ神の還るころ

奥羽街道風花となる夕べ

蕉翁の碑に秋寂ぶの風の音

とつぷりと暮れて二つの茸籠

大輪の菊懸崖の菊が座に

草の露ひらひらと季移りゆく

鉈彫りの弥勒の寺に冬の蠅

一人とはよし啄木鳥の森へ来て

萩尾花風を一つにしてゐたり

風を一つに

主宰作品

増成栗人

荒川心星

母校いま

放たれて人恋ふ牛の鳴く秋ぞ
夕かなかな背ナをまろめて墨を磨る
蛇穴に入る飛鳥路の墳の道
とつぷりと日を溜めて山粧へり
オルガンの聖歌ここまで秋深む
母校いま栃の実の落つ音のして
曼珠沙華そこだけに日が暮れ残る
鴟日和今生にまだ未練あり

柿の秋伊吹山が力抜いてをり
粗壁の蔵に沿ふ道茶が咲けり
椿の実日ざしに粘りあるやうな
いわし雲路地まで届く発車ベル
松なべて同じ傾ぎに冬隣
蓮池の敗れのはじめを巡りけり
草の絮潮入川の満つるころ
自転車を持たぬ暮しや冬晴るる

柿の秋

半谷洋子



羽音集

増成栗人 選



敬老日ロールケーキを選びをり 横須賀 鈴木 崇
 花煙草川の匂ひを運ぶ風
 複雑なバスの路線図秋渇き
 下総や泡立草の黄を競ふ
 玉葛十帖灯火親しめり
 道に葛樹上にも葛雨しとど 土浦 小林和子
 爽やかや話し上手と聞き上手
 長き夜や墨するときは正座して
 一人居の厨仕事よ鉦叩
 どんどはれで終る語部虫月夜
 生きものに眼と口と耳天の川 松戸 吉清和代
 月見団子ときをり風の立ちにけり
 日本の風が吹きをり芒原
 末枯るる糸のころ草も風音も
 桐一葉いちまい空を落としたる
 鳥渡るあららぎの実のほの甘く 我孫子 相川 健
 さざ波の光を纏ふ浮寝鳥
 眠りより覚め早暁の大野分
 秋穂高白き木椅子と赤き屋根
 椎の実の落つるに迷ひなかりけり

谷口摩耶



花八つ手

花八つ手一人の午後のストレッチ
 眩けば答へるやうに冬の鵞
 ホットココア冬の芝生を玻璃越しに
 図書室に毛糸の帽子増えて来し
 その奥に何かありさう冬紅葉
 ポインセチアの横にしばらく乳母車
 あたたかき十一月の忌を修す
 冬の月祖父と私を繋ぐもの

茶庵閑話

虫丸



お正月はー
無敵へてー

おめでとう
ございませう
本年もよろしく
お願いいたします

やあ
おめでとう



お正月と
いえは
歳時記で
春夏秋冬とは別に
新年が独立している
のはなぜでしょう

それはね
正月は季節と
いうより
行事の
意味合いが
強いからだよ



門松や
初詣や
注連縄と同じで
雑煮やお屠蘇も
食物の季節ではなく
行事の季節だよ
だからお正月は
行事が多くて
いそがしいときとも
いえるんだよ

なるほどー

孫も来るし



まったく
そうですね
雑煮におせちにお餅に
お屠蘇と
お正月は食べるのに
忙しくて太る暇も
ありません